

堂平山鳥獣保護区を中心としたニホンジカの行動について

森林環境担当 森田 厚

1 はじめに

埼玉県においてもニホンジカ(以下、シカとする)による農林業被害が問題となっており、さらに天然林においてもその影響が深刻な状況となっていることが明らかになってきています。県では柵などの設置による農林業の被害防除対策とともに、シカの個体数を抑制するため捕獲を進めています。しかし、捕獲の担い手の中心となる熟練した狩猟者の高齢化や減少が急速に進み、近い将来、現在のような捕獲ができなくなる恐れがあることから、新たな担い手の確保・育成や捕獲の効率化が喫緊の課題となっています。

シカを効率的に捕獲するためには、捕獲手法の選択や実施時期・場所の選定をシカの行動に合わせて的確に行う必要があることから、シカの行動実態について調査を開始しました。

2 調査方法

調査は生息密度が季節的に変動することが確認され、広域で移動するシカの存在が想定された堂平山鳥獣保護区内で囲いわなを使用してシカを生体捕獲し、GPS首輪を装着して実施しました。

GPS首輪の測位スケジュールは季節的な移動実態を明らかにすることを目的として少なくとも1年間追跡できるよう1時間毎としました。また電池の消耗を最小限にするため詳細な位置の確認と蓄積されたデータの回収は原則月一回とし、急な遠距離移動等により行方不明になることを防ぐため、随時VHF電波(ビーコン)によるおおまかな位置を把握しました。

平成28年10月以降、首輪装着を目的として8頭のシカを捕獲しました(表1)。有害捕獲等によりこれまで1年間連続で追跡できたのはNo. 6およびNo. 7の2頭にとどまっています。

表1 捕獲個体一覧

No.	捕獲日	性別	体重(kg)	頭胴長(cm)	首回り長(cm)	備考
1	2016/10/5	♂	50	136	37	1本角 未装着
2	2016/12/6	♀	35	105	30	死亡(2017/3/22確認)
3	2017/1/17	♀	40	120	34	有害捕獲(2017/4/22)
4	2017/7/9	♀	40	120	35	回収(2018/4/16)
5	2017/9/22	♀	45	130	37	2018/8~信号途絶・未回収
6	2017/12/10	♀	40	120	32	回収(2019/1/18)
7	2017/12/22	♀	55	130	38	追跡中
8	2018/12/13	♀	35	110	35	追跡中

3 結果と考察

今回の報告では、No. 3とNo. 4の移動範囲の特徴についてと、No. 5、No. 6およびNo. 7の同所的な土地利用について説明します。

(1) No. 3とNo. 4の行動範囲

No. 3は約3か月の間に鳥獣保護区内から大霧山東面の東秩父村皆谷地区、さらに観音山北麓へと活動地域を変えましたが、期間中に前の活動地域に戻ることはなかったことから、この個体は季節的に移動する個体である可能性が高いと考えられました。

また東秩父村皆谷地区では夜間は秩父高原牧場の採草地、昼間はその周辺の林内を集中的に利用していました(図1)。採草地では身を隠せないため、日中は林内にとどまり、夜間、採草地で採餌していたものと考えられました。

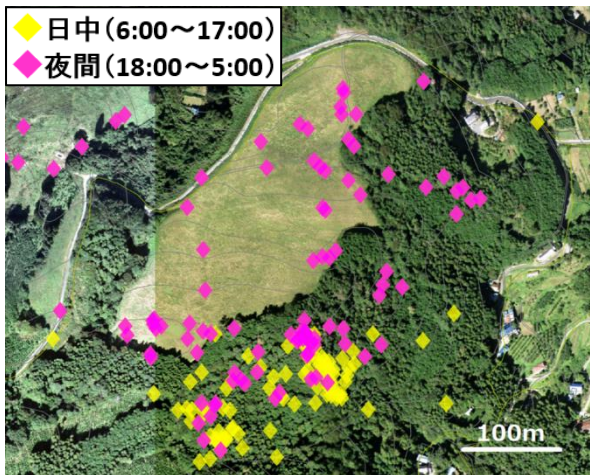


図1 No. 3 採草地と森林の利用状況

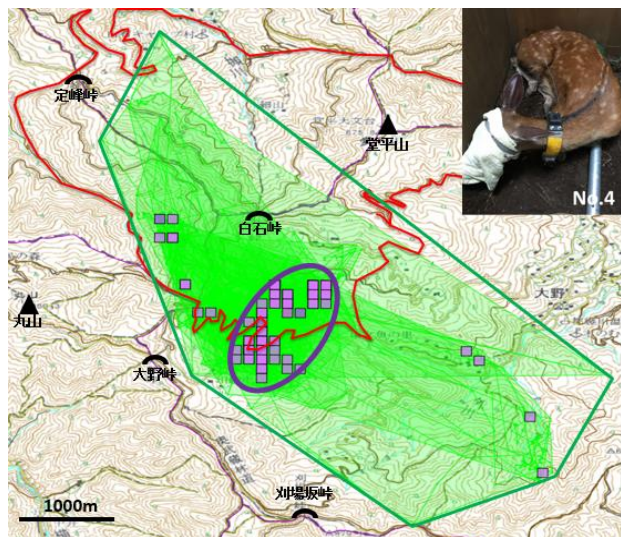


図2 No. 4 行動範囲と集中利用エリア

一方でNo. 4は約9か月の間、森林管理道大野峠線及び橋倉線の周辺(図2 円内)を中心として行動していました。直線距離で約3km離れた東秩父村白石地区やときがわ町大羽根川右岸などまで移動することはありましたが、いずれも短期間でこの地域に戻ってきていたことから、定着性の高い個体と考えられました。

(2) No. 5, No. 6, No. 7の同所的な行動

平成30年3月のNo. 5, No. 6及びNo. 7の行動範囲を重ねたところ、それぞれの活動が集中している箇所の一部が重なっていました。最も多く重なっていた箇所は耕作放棄地とその周辺でした。時間帯としては夜間が多く、No. 3同様にここを餌場として利用していたと考えられました。またその近くの林内にも3頭が集中して日中滞在している箇所が確認できました。

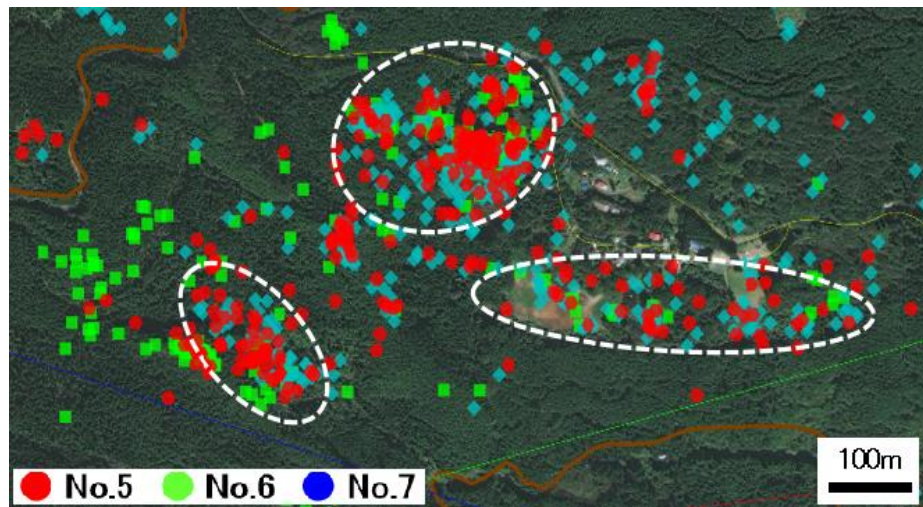


図3 No. 5, No. 6, No. 7の集中利用エリアの重複

4 まとめ

GPS 首輪を利用した行動実態調査により鳥獣保護区外へ行動範囲が移動する個体と、反対に行動面積は変化するものの行動の中心となる地域が移動しない定着性の個体の存在が明らかになりました。

また採草地や耕作放棄地が季節的に餌場として集中的に利用され、その際、近隣に集中して滞在する場所が形成されることが明らかになりました。さらにこのような場所は近隣で行動している他の個体(グループ)も同時に利用していることも明らかになりました。

このようなシカの行動が集中する場所や周辺の移動経路などは、捕獲の効率化を図るうえで重要となります。今後は利用が集中する場所とその要因の解明、捕獲の効率化を図るための適切な時期・方法について研究を進めていきます。